

言語のアスペクト的性質を基盤とした話者の感情表
出：
日本語の補助動詞「てしまう」と英語のGet受動文を
例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 敏広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007359

言語のアスペク特的性質を基盤とした話者の感情表出*

日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文を例に

田村 敏広 (静岡大学 情報学部)

1. はじめに

発話によるコミュニケーションでは、命題的情報のみならず、より主体的な情報、すなわち話者自身の様々な情的情報が伝達される。この情的情報には、命題的情報に対する断定や留保などの心的態度、驚きや後悔などの感情や情感といった、話者の心の動きを反映した情報が含まれる。

いわゆる理論言語学では、このような言語の情的情報は注目されることはなかったが、語用論や社会言語学、会話分析などの領域において言語コミュニケーション研究が盛んになったことで、この情的情報も言語学的な分析対象として認められることとなった。

本稿では、日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文を分析対象として、伝達される情的情報と言語表現自体のもつ意味、特にアスペク特的性質に着目し、その関係を明らかにしたい。これら日英語の両言語表現は、統語的類似性をもたないが、両者には意味レベルでの強い類似性をもつ。本稿では、この類似性を基盤に、それぞれの言語的性質を紐解くことで、両者が伝達する情的情報の発生源を探っていく。

2節では、補助動詞「てしまう」と Get 受動文によって伝達される情的情報に着目し、その性質を探っていく。3節では、両形式の意味分析を行い、幾つかのアスペク特的性質が共有されていることを明らかにする。続く4節では、共有されるアスペク特的性質が情的情報を伝達する基盤となっていることを論じる。

2. 伝達される情的情報の性質

2.1. 情的情報を伝達する二つの形式

その統語的性質に着目すると、日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文の間には共通点や類似点のようなものは存在しないように思える。しかし、両形式が言語コミュニケーションにおいて伝達しようとする意味は非常に類似している^[1]。

まず、日本語の補助動詞「てしまう」について観察をしよう。よく知られているように、この補助動詞「てしま

う」によって、話者の様々な感情、すなわち情的情報が伝達される(杉本(1991,1992), 藤井(1992), 西川(1996), 鈴木(1998)など)。次の例を比べてみよう。

- (1) a. 仕事に遅れた。
b. 仕事に遅れてしまった。

両者を比較してみると、(1a)よりも、補助動詞「てしまう」を使用した(1b)の方が、「仕事に遅れたこと」に対する話者の残念さや焦り、後悔の念などの情的情報がより一層色濃く読み取れる。このように、補助動詞「てしまう」を通じて、話者の感情的意味が表出される。

一方、英語の Get 受動文も同様の性質をもつことが明らかにされている(Hatcher(1949), Lakoff (1971), Chappell(1980), 岩澤(1993, 2001), 田村(2008)など)。以下のどの例も、話者の感情、すなわち情的情報を伝達している^[2]。

- (2) a. Our grant got cancelled. (darn it!)
(岩澤 2001:258)
b. How did this window get opened?
(Lakoff 1971:155)

(2a)では、括弧内の *darn it!* に表されるように、研究費が打ち切られてしまったことに対する話者の失望や落胆といった情的情報が伝達されている。また、(2b)の話者は、文字通り「どのように窓が開けられたかを尋ねている」のではなく、「どうして窓が開けられてしまったのか」と聞き手を非難しているのだという。つまり、形式的には疑問文であるが、その実は疑問文ではない。従って、聞き手には、*I'm terribly sorry.* のような応答が期待されているのである。

これら日英語の両形式で観察される情的情報は、言語表現形式自体が常にもつ意味(entailment)ではない。言語コミュニケーションの場面において、状況や経験、百科事典的知識などの文脈から副次的に発生

する含意(implication)や言外の意味と呼ばれる類いの意味情報である。事実、次の例のように、上記の情的情報が必ずしも伝達されるわけではない。

(3) a. あまりにも面白かったので、一気に読んでしまった。

b. Asparagus got boiled.

(3a)の補助動詞「てしまう」は「事態の完了」を伝達している側面が強く、話者の感情といった情的意味を読み取るのは難しい。また、(3b)の Get 受動文の場合にも、アスパラガスが茹で上がったことに対して話者が何らかの情的情報を伝達しているとは考えにくいだろう。

言語コミュニケーションにおいては、文脈やパラ言語的要素によっては、どのような言語表現にも話者の感情が読み取れるかもしれない。まず、この点について確認しておこう。

(4) a. 明日は晴れた。

b. It will be fine tomorrow.

これらの発話でさえも、韻律的な強調やため息などのパラ言語的要素、もしくは文脈次第では話者の感情を十分に伝達することができよう。しかし、本稿での両形式の情的情報はそうではない。文脈やパラ言語的要素のような、いわば言語外的要因によって伝達されるものではなく、言語表現自体のもつ意味に根ざしたものであると考えられる。

両形式の情的情報の伝達可能性が言語外的要因によって生み出されるものではないことは、両形式が、報道などの高い客観性が求められる場面においては用いられにくいという事実とも矛盾しない。

(5) a. 昨夜未明、〇〇区の路上で、歩道を歩いていた男性が、覆面をした男にナイフで刺される
/*刺されてしまう */という事件がありました。

b. A man who had been playing football at the sport club {was / *got} shot by a man wearing a mask.

補助動詞「てしまう」も Get 受動文も口語的であるといわれ、言語表現に対して高い客観性が求められる場面においては馴染まない。この事実は、両形式によっ

て伝達される情的情報が言語外的要因ではなく、言語表現自体がもつ、揺らぎない性質に動機づけをもつことを強く示唆している。

以上のように、一見、共通点や類似点を有しないようにみえる両形式には、情的情報の伝達可能性という点において強い共通性が観察される。本稿では、この共通性が決して偶発的なものではなく、共有される何らかの言語的性質を基盤としていていると考える。次節では、情的情報の質においても何らかの共通性や類似性が存在するのかを観察する。

2.2. 情的情報の質

そもそも、両形式によって伝達される話者の感情、すなわち情的情報はどのような種類のものなのであるうか。この節では、その情報の質に目を向けたい。

まず、情的情報を伝達していると考えられる両形式それぞれの例についてみてみよう。

(6) a. 昨日のドラマ、見逃してしまった。

b. ああーあ、三の宮は焼けてしまった！宿なしや、ここに置いて貰おうかな。 (藤井 1992:32)

(7) a. John got promoted instead of me, the ingratiating... (Chappell 1980:437)

b. Why did I get involved? There's no money in it, there's no items, no rewards.
I shouldn't have gotten involved.

田村(2008, 2011)で述べられるように、補助動詞「てしまう」と Get 受動文の両形式は、話者の否定的な感情を伝達する傾向が強い。上記の補助動詞「てしまう」の例において、(6a)では話者の「後悔」の念が、(6b)では話者の強い「失望」が表出されている。一方、Get 受動文の例である(7a)では、話者ではなく、John が昇進してしまったことへの「妬み」が、(7b)では、話者自らが関与してしまった過去の行為への「後悔」が表出されている。

これら両形式を多数観察してみると、情的情報を伝達していると考えられる例のほとんどが話者の否定的な感情であり、おおむね否定的な情的情報を伝達する傾向にあることに間違いはない³⁾。両形式が情的情報を伝達する可能性をもち、更にその情報の質にも類似性があることは、両形式には共有される何らかの意味性質があり、それが情的情報を伝達する基盤となっ

ていると考える本稿の主張を強く支持するものであろう。3節でみるように、両形式には否定的な情的情報を伝達するのに適したアスペクト的土壌が備わっているのである。

しかし、これら両形式は必ずしも否定的な情的情報のみを伝達するわけではない。少ないながらも、状況次第では「予想外の驚き・喜び」といった、どちらかと言えば肯定的な情的情報をも伝達することがある。次の例をみてみよう^[4]。

(8) a. ねえ、聞いて！先生に褒められちゃった。

b. 宝くじ、当たっちゃった！

(9) a. Mary got admitted to Harvard! (Isn't she lucky!)

b. Jane got examined by a Macquarie St specialist! (What a good news!)

(Chappell 1980:437)

(8)の補助動詞「てしまう」、(9)の Get 受動文のいずれの例においても、話者の肯定的な情的情報が伝達されている。但し、両形式によって伝達される肯定的な情的情報は、話者にとって「予想外の」驚き、もしくは喜びでなければならない(Chappell(1980), 田村(2008)など参照)。

以上、補助動詞「てしまう」と Get 受動文には、話者の否定的な感情、すなわち否定的な情的情報を伝達しうる形式であること、また、「予想外の驚き・喜び」に限定されるものの、肯定的な情的情報も伝達する可能性があることをみた。

2.3. 情的情報伝達の条件

2.1 節でみたように、情的情報は両形式に常に伝達されるわけではない。では、両形式の情的情報はどのような条件のもと伝達されうるのだろうか。まず、両形式ともに、過去時制での使用の方が、情的情報が伝達されやすいようである。次の例をみてみよう。

(10) a. 彼をみると、いつも笑ってしまう。

b. そんなことを言われても困ってしまう。

(11) a. John always gets yelled at whenever he enters the room.

b. My computer always gets locked.

これらの例のような現在時制での使用においては、両形式ともに本稿で扱うような否定的(もしくは肯定的な)情的情報はあまり感じられない。両形式が過去時制で使用された場合の方が、情的情報を伝達する可能性が高いと言える。

但し、過去時制での使用が、常に情的情報の伝達に繋がるわけではない。両形式が話者の感情を表出するには、否定的な情的情報であれば、「話者が事態の発生を望ましく思っていない」という文脈を満たす必要がある。次の例をみてみよう。

(12) a. 信じられない。どうしてそんなもの、買っちゃったの？

b. Yesterday I got arrested for accidentally hitting a kid with a paintball so the police said that I was charged with a class 2 misdemeanor. Can this affect my chance of getting a job when I am 16 or getting a college?

これらの例では、話者が両形式によって記述される事態の発生を望ましく思っていないことが言語的に明示されている。(12a)の場合、話者の「信じられない」という表現から、この事態の発生を望ましく思っていないことが伺える。また、(12b)においても同様に、Can this affect my chance of getting a job when I am 16 or getting a college? からも、(当然ではあるが)話者にとって逮捕されることが望ましくない事態であることが明示されている。

一方、肯定的な情的情報が伝達されうる文脈は、「話者にとって望ましい事態」であり、先にも述べたように、「その発生が予想外」でなければならない(例(8),(9)を参照)。次の例のように、話者にとって事態の発生が予想の範囲内であるような場合には、両形式は馴染まないようである。

(13) a. ?やっぱり褒められちゃった！

b. ? As I guessed Mary got admitted to Harvard!

話者にとって望ましい事態である場合、両形式によって表出されるのは予想外の驚き・喜びであり、(13a)の「やっぱり」や、(13b)の As I guessed のような表現と

は共起しにくいようである。

以上のように、両形式が情的情報を伝達しうするためには、過去時制である方が好ましく、適した文脈が必要であることをみた。

2.4. まとめ

この節では、補助動詞「てしまう」とGet受動文が、話者の感情を表出する、すなわち情的情報を伝達しうること、そして、それらは特殊な場合を除き、「後悔」や「失望」などの否定的な情的情報であることをみた。更に、その情報は文脈が必要なことに加え、両形式が過去時制で用いられる場合の方が伝達される傾向が強い。

次節では、このような情的情報が両形式のどのような言語的性質に根差しているのかを考察する。

3. 両形式に共有されるアスペクト的性質

補助動詞「てしまう」とGet受動文ともに、類似した話者の感情、すなわち情的情報を伝達しうる形式であることをみた。本稿では、この共通性は決して偶発的なものではなく、いわば必然的なものであると考える。つまり、両形式は何らかの言語的性質を共有しており、それこそが両形式が類似した情的情報を伝達する基盤となっているのではないかと考える。この節では、両形式に共有される意味性質、特にアスペクト的性質を中心に探っていく。

3.1. 動的事態

興味深いことに、補助動詞「てしまう」とGet受動文には、共起する動詞に関して類似した選択制限を有している。以下にみるように、両形式ともに「行為もしくは変化」という動的事態を表す動詞(句)とは問題なく共起可能である一方、「状態」のみを表す動詞(句)とは共起できない。

まず、補助動詞「てしまう」についてみてみよう。

- (14) a. 思わず、弱音を吐いてしまった。
b. 昔の町並みとはすっかり変わってしまった。
- (15) a. *彼の自転車は体育館の裏にあってしまった。
b. *たかさんのお金が必要になってしまう。

(鈴木 1998:51)

(14)のように行為や変化等の動的事態と共起可能で

あるが、(15)の「ある」「要る」のように、純粹に状態のみを表す動詞(句)とは共起できないのである。

このような性質は、Get受動文でも同様に観察される。以下の例をみてみよう。

- (16) a. Mary got scolded for being late.
b. The camera got broken when he dropped it.
- (17) a. *Charlie Chaplin got loved by millions.
b. *He got known as the father of linguistics.

補助動詞「てしまう」の場合と同様に、(16)のようなscoldやbreakといった動的事態を表す動詞(句)とは問題なく共起できるが、(17)のように状態を表す場合には共起可能性が低くなる。このようなGet受動文の性質は、その解釈をBe受動文と比較することでより明確になる。

- (18) a. The heroine was surrounded by zombies.
b. The heroine got surrounded by zombies.

(18a)のBe受動文の場合、「ゾンビに囲まれた」という動的事態としての解釈と「ゾンビに囲まれていた」という状態の解釈どちらも可能である。それに対して、(18b)のGet受動文では前者、すなわち動的事態としての解釈しかない。このことから、Get受動文が動的事態を表す動詞(句)と共起しないという選択制限をもつことは明らかであろう。

以上の事実は、補助動詞「てしまう」とGet受動文が動的事態の記述に特化していることを表している。つまり、両形式ともに、ある行為や状態変化のみを記述する言語形式なのである。

3.2. 瞬時性

この節では両形式のアスペクト的性質に目を向けていこう。両形式が行為や状態変化といった動的事態を表すことは既にみたが、その事態のアスペクトには興味深い類似性が観察される。

補助動詞「てしまう」は、行為や状態変化を段階的なものとして描写する副詞等とは共起しにくい傾向がある。次の例をみてみよう。

(19) a. *次第に雨が降ってしまった。

(鈴木 1998:51)

b. ?街の灯りも, {少しずつ/だんだん}消えて
しまった。

「次第に」や「少しずつ」, 「だんだん」といった副詞表現は, 行為や状態変化といった動的事態が段階的に進行することを表している。つまり, 補助動詞「てしまう」の動的事態は, 段階的なものではなく非段階的, すなわちアスペクト的には瞬時的な事態として解釈されるのである。

事実, 補助動詞「てしまう」は, 以下の(20)のような副詞表現等と共に起する傾向が強い。

(20) a. あれだけの害虫を一瞬のうちに殺してしまった。

b. あつと言う間にたいらげてしまうよ。

c. 座った途端に眠くなってしまった。

ここで用いられる副詞表現は, どれも行為や状態変化が瞬時的な動的事態であるとして記述するものであり, 補助動詞「てしまう」の瞬時性とアスペクト的に合致するため, 共起する傾向が強いのだと考えられる。

Get 受動文にもこのようなアスペクト的性質があるのだろうか。次の例にみるように, Get 受動文も行為や状態変化を段階的に表す副詞類とは共起しにくい傾向にある。

(21) a. ??Our house got gradually built.

b. ??The water got added little {by little / by degrees} into the tank.

(21a)の gradually, (21b)の little by little もしくは by degrees などの使用による容認性の低さは, Get 受動文が行為や状態変化などを非段階的な事態, つまり瞬時的な事態として表現する言語形式であることを示唆している。

Get 受動文もまた, 事態を瞬時的なものとして記述する表現と共に用いられる傾向がある。幾つか例をみてみよう。

(22) a. They'll get caught in a moment.

b. His hand got cured in a blink.

c. My computer got instantly locked.

これらの例で用いられる前置詞・副詞表現はどれも事態の瞬時性に焦点を当てるものである。このような表現が Get 受動文に多く用いられるのは, そのアスペクト的性質と合致しているからだと考えられる。

Get 受動文がもつアスペクト的性質である瞬時性は, 動詞 get が本来的にもつアスペクト的性質から引き継いだものだと考えられる (Haegeman(1985), Givón&Yang(1994))。動詞 get が補部に形容詞をとる場合, 次のような選択制限がみられる。

(23) a. He got angry.

b. ??He got tall.

(小西 1996:6)

同じ形容詞でも容認度に差が生じるのは興味深い。(23a)のように「怒った状態」への変化は瞬時的な変化であり, 動詞 get のアスペクト的性質と矛盾しない。しかし, (23b)のような変化は動詞 get の性質と馴染まないようである。「背が高い状態」への変化は, 通常, 段階的な状態変化であり, 動詞 get の瞬時性とは矛盾してしまうために容認度が低いのだと考えられる。Get 受動文はこのような動詞 get の瞬時性を保持しているのだろう。

このように, 両形式ともに, ある行為や状態変化を瞬時的なものとして提示するアスペクト的性質をもっている。次節では, このアスペクト的性質について更なる観察を行う。

3.3. 事態の実現と終結

これまで, 両形式が行為や状態変化といった動的事態を記述する形式であること(3.1 節参照), それら事態を瞬時的なものとして提示するといったアスペクト的性質をもつこと(3.2 節参照)をみた。ここではアスペクト的性質について引き続き観察を行う。

補助動詞「てしまう」は, 行為や状態変化の実現もしくは終結に焦点を当てる形式であるという(金田一(1955), 吉田(1971), 杉本(1991,1992), 金水(2004)など)。つまり, アスペクト的に, 行為や状態変化が実際に生じる, もしくは完遂することに重きを置いた言語形式である^[5]。次の例をみてみよう。

- (24) a. どこかで財布を落としてしまった。 (実現)
 b. 一気に最後まで読んでしまった。 (終結)

(24a)では動的事態の発生が表され、(24b)では動的事態の終結が表されている。このように、補助動詞「てしまう」は、記述される動的事態の性質によって「実現」と「終結」が表される。

このような「実現」と「終結」を表すというアスペクト的性質は、次のように補助動詞「てしまう」によって記述された事態がキャンセルできないことから窺い知ることができる。

- (25) a. その湿った丸太は燃やしても、燃えなかった。
 (影山 1996:288)
 b. ??その湿った丸太は燃やしてしまっても、燃えなかった。
 (26) a. お父さんは起こしても、起きなかった。
 b. ??お父さんは起こしてしまっても、起きなかった。
 (27) a. カ一杯書いても、書けないかもしれない。
 b. ??カ一杯書いてしまっても、書けないかもしれない。

(25a), (26a), (27a)の文は、一般的に容認できるとされている(影山(1996))。しかし、それぞれの(b)の例のように、補助動詞「てしまう」を使用するとキャンセルすることが非常に難しい。これらの事実を、補助動詞「てしまう」の「実現」と「終結」を表すというアスペクト的性質の存在を裏付けていると言えるだろう。

『改撰標準日本語文法』(1928)によれば、補助動詞「てしまう」は「済まふ」(済ます)から発達したものであるという。この考察が妥当であるならば、補助動詞「てしまう」が事態の「実現」や「終結」を表すアスペクト的性質をもつことも納得できよう。

次に Get 受動文に移ろう。Get 受動文にも、補助動詞「てしまう」と同じようなアスペクト的性質が観察されるのであろうか。Tobin(1993)が、Get 受動文について “The GET-passive focuses on much more strongly on the outcome of the action predicated in the verb, on the resultant state of affairs... (266)” と述べているように、Get 受動文は「事態の発生とその結果状態に焦点を当てる」形式なのである(他にも Vanrespaille (1996), Tamura(2009)な

ど)。

Get 受動文がこのようなアスペクト的性質をもつことは、次の(28)のように、事態の最終局面に焦点を当てる副詞句等が多く用いられることにも示唆される(Downing(1996)など参照)。

- (28) a. *At the last moment*, the criminal got fired in the head.
 b. I'm glad this *finally* got cleared up.
 c. They would have got transferred to Tunis *eventually*.

(Downing 1996:185)

これら斜体で表されている副詞句は、行為や状態変化の最終局面に焦点を当てる表現であり、Get 受動文に多く用いられるという。Get 受動文の「事態の発生とその結果状態に焦点を当てる」というアスペクト的性質から、このような副詞句等が多く用いられるのは当然であろう。

このようなアスペクト的性質も、起動動詞(inchoative verb)としての get から継承したものだと考えられる(Gronemeyer(1999)など)。起動相は、事態の開始、すなわち、事態の実現を表すアスペクトであり、日本語の「なる」等もこのアスペクト性質をもつ。このような起動相をもつ起動動詞が過去形で用いられると、事態の発生とその結果状態に強い焦点を当てることになるのである。

Kimball(1973)によれば、起動動詞 get は次のように意味分解することができるという。

- (29) get NP / AP → come to have NP / be AP

ここでは、いわゆる「獲得の get」も、起動動詞としての get も、同様に come to という意味成分を有していることが表示されている。この come to によって表示される意味成分こそ起動相としての本質であり、Get 受動文にも継承されていると考えられる。このように考えると、Get 受動文が「事態の発生とその結果状態に焦点を当てる」というアスペクト的性質をもっていることも妥当である。

ここまでの議論をまとめると、補助動詞「てしまう」は行為や状態変化の「実現」と「終結」に焦点を当て、一方、Get 受動文は「事態の発生とその結果状態に焦

点を当てる」形式であり、厳密には両形式は事態の異なる側面に焦点を当てているものの、ある事態の発生に強い焦点を当てる形式であるという点は共通していると言える。

3.4. まとめ

この節では、特に、補助動詞「てしまう」とGet受動文のアスペクティック的性質に着目し、両形式は類似したアスペクティック的性質を共有していることを明らかにした。これは次の(30)のようにまとめることができる。

- (30) 補助動詞「てしまう」とGet受動文は、行為や状態変化といった動的事態を瞬時的なものとして提示するとともに、その事態の発生に強い焦点を当てる形式である

両形式のこのような性質が、2節でみたような話者の感情といった情的情報の伝達とどのように関わっているのだろうか。次節では、(30)で示したアスペクティック的性質と2節でみた情的情報の関係を考察する。

4. アスペクティック的性質と情的情報の伝達

2節では、両形式は話者の感情という情的情報を伝達しうる形式であることをみた。この点について、再度確認をしておこう。

- (31) a. 昨日のドラマ、見逃してしまった。 (= (6a))
b. Our grant got cancelled. (darn it!) (= (2a))

これらの例では、話者の「後悔」や「失望」の念といった否定的な情的情報が伝達されている。また、このような否定的な情的情報のみならず、次のように両形式は肯定的な情的情報も伝達しうる。

- (32) a. 宝くじ、当たっちゃった！ (= (9b))
b. Mary got admitted to Harvard! (Isn't she lucky!) (= (10a))

これらの例では、話者の「予想外の喜び・驚き」といった肯定的な情的情報を伝達している。

では、このような情的情報の発生源はどこにあるのだろうか。本稿では、(30)で示した両形式のアスペクティック的意味性質こそがその源であると考え、(30)で示した

ように、両形式は「行為や状態変化といった動的事態を瞬時的なものとして提示するとともに、その事態の発生に強い焦点を当てる」という性質を共有している。この、事態の「瞬時性」と「事態の発生の焦点化」が情的情報を伝達するための重要な基盤になっていると考えられる。

まず、「瞬時性」と情的情報はどのような関係にあるのかを考えてみよう。話者はこの両形式によって、その動的事態の発生が瞬時的なものとして提示しているのである。話者が事態の発生を瞬時的なものとして提示するというのはどういうことであろうか。言語コミュニケーションにおいて、話者は現実世界における様々な事態を切り取り、加工して、言語表現の型にはめ込み、聞き手に提示する。言語によって表現される事態は、話者の主観によって、いわば手を加えられた事態であり、現実世界において発生した事態をそのまま提示しているわけではない。これは、補助動詞「てしまう」やGet受動文を使用した場合も当然同じである。話者が両形式を使用する場合には、事態の発生を瞬時的なものとして主観的に解釈しているのである。

このような瞬時性は、話者の事態に対する無意志性と密接な繋がりがあると考えられる。話者が事態の発生を主観的に瞬時的なものと解釈するのは、ある動的事態に対し、(自らの行為もしくは状態変化だったとしても)自らの意志とは無関係に生じたものであり、自らの力が及ばない事態であると解釈している場合であるとも言えよう。このような話者の心理が表出されるのが、補助動詞「てしまう」とGet受動文であり、それゆえ、否定的な情的情報を伝達する基盤となっているのだと考えられる。また、この「瞬時性」と結びついた話者の無意志性から、文脈次第では、(32)のような「予想外の喜び・驚き」という肯定的な情的情報の伝達の可能性が生じるのであろう。

次に「事態の発生の焦点化」と情的情報の関わりを考察しよう。両形式が事態の発生に強い焦点を当てることであることが、情的情報の伝達のための基盤となりえるのであろうか。金水(2004)によれば、このような性質は、事態の「不可逆性」が含意に繋がるという⁶。すなわち、話者の「事態が発生して、もはや発生前の状態に戻ることはできない」という心理を表すのに適しているのである。このような「不可逆性」の含意こそが、(31)にみたような「失望」や「後悔」、「残念」などといった否定的な情的情報の伝達のための基盤となってい

るのであると考えられる。

但し、ここで言う「不可逆性」の含意は(30)のような両形式の意味性質から発生するものであり、時制とは無関係に生じるものであることに注意したい。しかし同時に、両形式が過去時制で使用された場合、その時制によっても「不可逆性」の含意は強められることになる。例えば、補助動詞「てしまう」の場合、過去時制で使用された場合の方が、否定的な情的情報の伝達の度合いが強いと感じられる(吉田(1971))。次の例を比べてみよう。

- (33) a. 大事なところでいつも足がつってしまう。
b. 大事なところで足がつってしまった。

(33a)では、話者は自らの習慣的事実を述べているが、そこには(30)の意味性質を基盤とした不可逆性の含意がある。つまり、「足がつる」という事態が発話時点で生じているわけではないが、それが自分にとって不可逆的な事態であるといったあきらめや不安、残念といった否定的な情的情報が伝達される。一方、過去時制で使用された(33b)の場合、意味性質を基盤とした不可逆性のみならず、過去時制によっても不可逆性が強められることとなる。従って、話者の否定的な情的情報はより一層鮮明なものと感じられるのであろう。

5. おわりに

本稿では、言語のアスペクト的性質と、言語コミュニケーションにみられる話者の感情表出、すなわち情的情報の関係性に着目した。

統語的には類似性をもたない日本語の補助動詞「てしまう」と英語の *Get* 受動文は、類似した情的情報を伝達しうる。本稿では、この類似性が決して偶発的なものではなく、必然的なものであるという立場のもと、両者のアスペクト的性質に着目した。興味深いことに、補助動詞「てしまう」と *Get* 受動文には共有されるアスペクト的性質が存在していることも明らかになった。このような性質こそが、両形式に同じように観察される情的情報を伝達するための基盤となっていることを主張した。

最後に、本稿には残された課題も多いことにも言及しておきたい。まず、補助動詞「てしまう」と *Get* 受動文によって伝達される情的情報の性質について、より詳細に観察する必要がある。また、両形式にみられるア

スペクト的性質と情的情報の関係が、結果指向性をもつその他の言語表現にも当てはまる言語一般性をもつものなのか、または両形式に偶発的なものなのか、という大きな問題も残されている。今後、この点について、理論的な観点からの議論が必要であろう。

6. 引用文献

- Chappell, Hilary 1980 "Is the *Get*-Passive Adversative?," *Papers in Linguistics* 13, 411-452.
- Downing, Angela 1996 "The Semantics of *Get*-Passives," *Functional Descriptions: Theory in Practice*, ed. by Ruqaiya Hasan, Carmel Cloran and David Butt, 179-205, John Benjamins, Amsterdam.
- 藤井由美 1992「「てしまう」の意味」『ことばの科学 5』17-40, むぎ書房.
- Givón, Talmy and Lynne Yang 1994 "The Rise of the English *GET*-Passive," *Voice: Form and Meaning*, ed. by Fox, Barbara and Paul J. Hopper, 119-149, John Benjamins, Amsterdam.
- Gronemeyer, Claire 1999 "On Deriving Complex Polysemy: the Grammaticalization of *Get*," *English Language and Linguistics* 3.1, 1-39.
- Haegeman, Liliane 1985 "The *Get*-Passive and Hatcher, A. Granville 1949 "To *Get/Be* invited," *Modern Language Notes* 64, 433-446.
- 岩澤 勝彦 1993「GET 受動文の語用論的含意はどこからくるか」経済理論 254 号, 33-51, 和歌山大学.
- 岩澤 勝彦 2001「感情表出としての *get* 受動文と完了概念 -意味の拡張と習慣化の間-」『意味と形のインターフェイス 上巻』, 257-265, くろしお出版, 東京.
- 影山 太郎 1996『動詞意味論-言語と認知の接点-』, くろしお出版, 東京.
- Kimball, John 1973 "*Get*," *Syntax and Semantics* vol. 2, Academic Press, New York.

- 金田一 春彦 1955「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編(1976), 155-327, むぎ書房, 東京.
- 金水 敏 2004「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』, 27-35, くろしお出版, 東京.
- 小西 友七 1996『英語のしくみがわかる基本動詞 24』, 研究社, 東京.
- Lakoff, Robin 1977 “Passive Resistance,” *CLS* 7, 149-162.
- 松下 大三郎 1924『標準日本語文法』勉誠社, 東京.
- 西川 真理子 1996「てしまう」の本来的機能」『奥田博之教授退官記念論集 言語と文化の諸相』, 75-88, 英宝社, 東京.
- 杉本 武 1991「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(1)九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)第4号, 109-126.
- 杉本 武 1992「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(2)九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)第5号, 61-73.
- 鈴木 智美 1998「てしまう」の意味」日本語教育 97号, 48-59.
- 田村 敏広 2008「Get 受動文」と「V てしまう」の意味的類似性とモダリティ的意味について」*JELS*(日本英語学会 25 回大会研究発表論文集)25, 245-254.
- 田村 敏広 2011 補助動詞「てしまう」から感動詞「しまった」へ—使用基盤モデルの立場から—, *Ars Linguistica* 18, 80-94.
- Tobin, Yishai 1993 *Aspect in the English Verb: Process and Result in Language*, Longman, New York.
- Toshihiro, Tamura 2009 “Get-Passives,” *Tsukuba English Studies* 27, 133-144.
- Vanrespaille, Mia 1991 “A Semantic Analysis of the English Get-Passive,” *Journal of Applied Linguistics* 5.2, 95-112.
- 吉田 金彦 1971『現代語助動詞の史的研究』, 明治書院, 東京.
- 吉川 武時 1973「現代日本語動詞のアスペクト研究」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編(1976), 155-327, むぎ書房, 東京.

脚注

- * 原稿の修正にあたり, 貴重なご意見をくださった査読者に感謝の意を表したい。なお, 本文中の不備や誤りはすべて筆者の責任によるものである。本研究は平成 24 年度科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号 24720216)による研究成果の一部である。
- 1) 筆者が知る限り, 日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文の両形式が類似した情情情報を伝達しうることを最初に指摘したのは岩澤(2001)である。但し, 類似性に関する詳細な分析は行っていない。
 - 2) Be 受動文の場合, このような話者の感情は表出されず, 事態を客観的に描写しているものとして解釈される。
 - 3) 表出されている話者の感情をどのように呼ぶかについては異論があるかも知れないが, これらを否定的な情情情報と捉えることは妥当であろう。
 - 4) 本稿では, 「ちゃう」も補助動詞「てしまう」の口語体として同様に扱う。
 - 5) 補助動詞「てしまう」については, そのアスペクトを「完了」や「完結」とする立場(寺村(1984), 森田(1989)など)と, 「実現」と「終結」とする立場(金田一(1955), 杉本(1991, 1992)など)がある。また, 鈴木(1998)のように, 必ずしもアスペクト的意味をもつわけではない, とする立場もある。
 - 6) 金水(2004)が扱っているのは, 補助動詞「てしまう」だけであり, Get 受動文については述べていない。